

### 仙台銀行 若手職員

上杉支店 佐藤夏美  
本店営業部 関航輔

### 吉岡知広

イズミノオト企画  
コーディネーター／チェリスト



今回は、コーディネーターの吉岡知広さんと、仙台銀行の若手職員1人は音楽大学出身、もう1人はクラシック初心者ですがクラシック音楽として「イズミノオト」第3回の楽しさについて対談しました。

自己紹介をお願いします。

佐藤 私は仙台市出身で、仙台銀行入行3年目になります。子供の頃から歌うことが好きで、高校時代は合唱部で活動していたのですが、声楽をより本格的に学びたいと考え、武蔵野音楽大学に進学しました。今でも時々演奏会に行くこともあり、クラシックの音楽を聴いたりしています。

吉岡 J・POPは私も好きです。クラシックは本業なので、気分転換やリラックスしたい時には別ジャンルの音楽を聴いたりします。

今回は、関さんのようにクラシック音楽は初心者という方も楽しんでもらえるよう、「クラシックの楽しみ方」をテーマにお話ししたいと思っています。まず、佐藤さんはどのように楽しんでますか。

佐藤 クラシック音楽のように歌詞がない音楽を聴く時は特に、その曲が表現する世界観や風景、街並みを想像しています。演奏会でも、席に座っていないながら世界を旅しているような気分を味わえます。クラシック音楽が少し難しそうというのとは違いますが、ある程度の予備知識を持つと聴くときにより楽しめると思います。例えばその作品の時代背景や作曲家について調べたり、YouTube等で聴いてみたりすると、実際に演奏を聴いた時、その曲がスッと入ってきて、想像が膨らみます。私もありません。それから、演奏時間がとても長い作品もありますが、その中で一つのメロディが色々な所に散りば

められていたり、隠されていたりします。そんな隠れた要素を見つけながら聴くことも、私の楽しみ方のひとつです。

関 私の場合、気分に合わせて音楽を聴くことがほとんどですが、曲の世界観や時代背景を想像しながら聴くのはまた違った楽しみ方があるように感じます。佐藤 この公演のテーマは「一般の演奏会とは違う」と比べて内容が濃いというか、読み物としても楽しめるですね。

吉岡 そう、これがこのコンサートシリーズのテーマのひとつで、チラシで予習してからコンサートをお楽しみいただくという企画です。そして、毎回一人の作曲家が焦点をあて、その生涯と作品をオムニバス形式で紹介していきます。

「イズミノオト」第3回目はどのような内容ですか？

吉岡 今回はポーランド前期ロマン派を代表し、ピアノの詩人と呼ばれる作曲家ショパンを紹介します。今でも多くの方に愛され続けるショパンの作品は、日本でも有名な作品が多く、華やかで技巧的な印象が強いのですが、ショパン自身はとても繊細で神経質な性格だったと言われています。それは暮らしぶりにまで現れていて、身だしなみや家具の二つ一つにも強いこだわりがあったようです。そのような繊細さや優雅さ、上品さなども彼の作品からは感じられます。佐藤 ショパンの作品には、ドラマやCMなどでも使われていたり、どこかで聴いたことのある作品がたくさんあります。今回のプログラムは、その中でも最高傑作のひとつとも言われています。

吉岡 幻想ポロネーズは、実は恋人ジョルジュサンドに別れを告げられた後に書かれた作品で、ショパン自身の感情の揺れ動きや焦燥感が感じられる作品です。はかなげで美しい愛があり、そしてその奥にきらめく気品を感じられる、ショパンの作品の中でも最高傑作のひとつとも言われています。

そして、私が演奏するチェロソナタは、友人のチェロ奏者から薦められた作品です。ショパンは別の関係でも、フランスの作曲家と共演を望んだそうです。このソナタは、チェロの楽器の特性が生かされていて、チェロパートが奏でるメロディがとても美しい作品です。この作品の第3楽章は、多くのチェロ奏者がアンコール曲として演奏しているの、聴いたことがあるという方も多いかもしれません。

## イズミノオトモダチ

文中敬称略

#### 【プログラム】

- シヨパン  
ノクターン 第2番変ホ長調 作品9-2・  
ワルツ 第7番嬰ハ短調 作品64-2・  
ワルツ 第2番変イ長調「華麗なる円舞曲」 作品34-1・  
チェロ・ソナタ 短調 作品65・  
バラード 第3番変イ長調 作品47・  
雨だれの前奏曲 変ニ長調 作品28-15・  
舟歌 嬰ヘ長調 作品60・  
革命のエチュード 作品10-12・  
マズルカイ短調 作品17-4・  
幻想ポロネーズ 変イ長調 作品61・

ピアノ・三又瑛子・北端祥人



吉岡知広  
チェロ・コーディネーター

仙台市泉区出身。桐朋女子高校音楽科、共学を経て桐朋学園大学音楽学部を卒業。その後、ライプツィヒ音楽大学大学院に在学するとともに、ライプツィヒゲヴァントハウス音楽院と学生契約をし、在籍。卒業後は同管弦楽団アカデミーに在籍。第9回ベルリン・フェスティバル第4回入賞。チェロを金木博幸、青木十良、藤原真理、毛利伯郎、C・キナーの各氏に、室内楽を今井信子氏、東京クオartetに師事。現在、仙台フィルハーモニー管弦楽団首席チェロ奏者として在籍。



北端祥人  
ピアノ

大阪府出身。2016年、第6回仙台国際音楽フェスティバル第3位など、国内外において数多くの賞を受賞している。京都国立芸術大学とベルリン芸術大学で研鑽を積み、ソリスト、また室内楽奏者として日本、ヨーロッパ各地で演奏を行う。これまでに佐々弘美、大川恵未、椋木裕子、上真一、ルカス・グロウの各氏に師事。2020年度より東京藝術大学附属音楽高等学校の非常勤講師として後進の指導にあたっている。



三又瑛子  
ピアノ

仙台市出身。才よりピアノを始め、桐朋学園大学ピアノ科を首席で卒業。同大学卒業演奏会、室内楽演奏会に出演。第16回ABC新人コンサート、第78回読売新人演奏会に出演。これまで、ピアノを庄司美知子、加藤備佳、田嶋悦子、室内楽を加藤知子、加藤洋之の各氏に師事。桐朋学園大学室内科、専攻演奏員、石川ミチヅクアカデミー、ミュージックアカデミー、inみやまなどで公式伴奏者を務める。NPO法人へのJACKメンバ。

仙台銀行ホール イズミティ21コンサートシリーズ  
Facebook公式ファンクラブ イズミノオトモダチ

会員募集中!

出演者のメッセージやコンサートに関すること、泉エリアの様々な情報、そして会員だけのお得な情報など発信していきます。ぜひ「いいね!」してください。

URL: <https://www.facebook.com/izuminootomodachi/>

新型コロナウイルス感染症予防のため、ご協力をお願いいたします

- 37.5度以上の発熱や咳、咽頭痛、倦怠感、味覚・嗅覚不良等の症状がある方は、ご来場をお控えください。●ご来場の際は必ずマスクを着用いただき、こまめな手洗い、手指消毒などの感染予防にご協力ください。●チケットの半券にお客様の氏名・電話番号をご記入ください。万が一、会場で感染者が出た場合は、連絡先を保健所等の公的機関へ提供させていただきます。あらかじめご了承ください。●新型コロナウイルス接触確認アプリ「cococa」等のインストールを推奨しています。●お客様同士の距離の確保をお願いします。●時間に余裕をもってお越しください。●退場は順番にご案内いたします。●感染予防のため座席数を制限して販売しています。必ずお買い求めいただいた座席にお座りください。●会場では大声での発声をご遠慮ください。●出演者・関係者へのプレゼントおよび、お客様のお荷物のお預かりはできません。●出演者・関係者への面会はお断りします。

仙台銀行ホール イズミティ21コンサートシリーズ  
イズミノオト 第3回 シヨパンノバラッド

チェロ・コーディネーター

### 吉岡知広

ピアノ  
北端祥人

2020  
11 / 23  
月祝

【開演】午後3時(開場午後2時30分)  
【会場】仙台銀行ホール  
イズミティ21 小ホール  
(仙台市地下鉄泉中央駅北3出口すぐ)

【入場料】全席指定 3,000円  
(市民文化事業団友の会料金 2,700円)  
※未就学児はご入場いただけません

# Frederic Chopin

【プレイガイド】仙台銀行ホール イズミティ21、日立システムズホール仙台(10月4日まで)、藤崎、仙台三越、ローンチケット(Lコード21816)

【チケットに関するお問い合わせ】仙台市市民文化事業団 総務課 TEL:022-727-1875 (平日9:30 ~ 17:00)

【公演に関するお問い合わせ】仙台銀行ホール イズミティ21 TEL:022-375-3101 (9:00 ~ 19:30・休館日を除く)

【主催】公益財団法人仙台市市民文化事業団、KHB東日本放送 【企画制作】仙台銀行ホール イズミティ21、HAL PLANNING 【協賛】仙台銀行

ーショパンは、洗練、上品、優雅、完璧な美を求める潔癖さを愛していた。そして、故郷への強い想いを抱えていた。ショパンノバラッド(物語)を追う。

# Frederic Chopin



ショパンとサンド

フレデリック・ショパンは、1810年、ポーランドに生まれる。文学に精通した父、家庭的でピアノと音楽の上手な母。そして姉と二人の妹の中の唯の男の子として生まれた。彼がはじめて触れた音楽は母がよく子守歌がわりに口ずさんだポーランド民謡だろう。幼い頃からピアノの即興演奏が得意で、7歳で最初の作品『ポロネーズ』を作曲している。ポロネーズは、マズルカと並ぶポーランド起源のダンスである。ショパンの作曲家としての人生はポロネーズに始まり、絶筆となるマズルカに終わっている。

ポーランドの貴族たちはショパンの才能にたちまち夢中になり、次々と自らの館に招いて演奏させた。またショパン家のサロンには、常に学者や教育者たちが集まり、非常に高い文化的水準で会話や音楽を楽しんでいた。ショパンはその中で、自らのユーモアと才能を発揮し、ポーランドの民族音楽をもとに、得意の即興演奏を続け大人たちを喜ばせた。ショパンはこうしてサロン文化の申し子のようにして成長し、自らの演奏で聴衆を喜ばせる術を培った。

どんなにショパンがワルシャワを愛していても、家族や友人、初恋の相手とどんなに離れたくなくとも、その才能ゆえにピアノリストとして世の中に出るためには、ポーランドを離れなければならなかった。二度家を出たら、永遠にもどれないような気がしてならない。そう親友への手紙に書き残し、1830年、ショパンは故郷ポーランドを離れ、ウィーンへと向かった。

ショパンは最初、ウィーンにも受け入れられたかのように思えたが、なかなか演奏活動の機会を得られなかった。ショパンは孤独に耐えるべく、作曲に熱心に取り組んだ。心の中に渦巻くホームシックを昇華させるように『マズルカやポーランド民謡の変奏曲を手がけた。しかし、このままではいられない、パリならばチャンスがあるかもしれない』ショパンはウィーンを離れることにした。

しかしウィーンからシュトゥットガルトを経由し、パリへ向かう途中の1831年9月8日、ワルシャワがロシアに陥落する。父よ、母よ、私のたいせつなものたちよ、みんなどこにいるのだ、死んでしまったのか?ショパンのこのニュースに対する慟哭は激しかった。ロシアへの深い憤りに高揚したかと思えば、次の瞬間にやってくるのは深い落胆だった。練習曲集作品10『の中の『革命のエチュード』にはこの時のショパンの悲嘆が大いに映し出されているとされている。

ショパンがたどり着いたパリでは、人々はロッシニのグランド・オペラに興じ、ベルリオズの『幻想交響曲』とマイヤーベールからの亡命貴族たちのサロンで演奏会を重ね、やがて、同世代のメンデルズゾーン、シューマン、リストらとも交友を持つようになる。彼はよく、当時のイタリア・オペラの歌手たちが即興的に歌う旋律を書き取り、取り入れていた。『ククタン作品9-2』も、そんな装飾音を多数含むショパンらしい作品だ。パリの洗練されたサロンで、ショパンは念願の成功を手にする。当時間競争の進むピアノ会社は、ショパンに「改良されたピアノ使つてほしい」という話を次々と持ち掛けた。彼も喜んで新しいピアノで次々と作曲した。それまでのピアノから鍵盤の数も増え、ペダルを使用することによるレガートな演奏も可能にした。ため息の出るような微妙なニュアンス表現も可能になった新時代のピアノは、ショパンの望む音を可能にした。彼はとりわけブレイエル社のピアノを愛用した。ワルツ、即興曲、ノクターン…「性格的小品」と言われる比較的短い作品を彼は次々と生み出した。華やかなのにどこか愁いを帯びた繊細なメロディの数々は、広くピアノを嗜む貴族たちにも人気だった。『ワルツ第2番華麗なる円舞曲作品34-1』もその中の傑作だ。

ショパンは、リストのサロンで女流作家ヨルジュ・サンドと初めて出会ったとき、決していい印象を抱きはしなかった。一方サンドは、ショパンにたちまち興味を持った。サンドは作家として成功した当時では珍しい独立した女性だった。前夫との間に2人の子どもがいたが、サロンの様々な男性との噂も多い恋多き情熱的な大人の女性であった。ショパンは当時、同郷のマリアと婚約中だったが、サンドはそれを知りつつ、ショパンとの距離を静かに縮めて行く。サロン仲間だった画家のドラクロワが、ショパンの音楽にうっとりとして恋憧れるサンドの姿を描いている。ショパンはこの頃から胸を患い、健康不安から結婚を反対されマリアとの婚約を解消。ひとつの恋に終止符を打った。そんな傷心のショパンを、サンドは母のような温かさで理解で包みこんだ。ショパンもこの感受性の鋭い女性との間に段々と居心地の良さを感じ、惹かれていく。



マヨルカ島バルデモーサの街

- 1810年 ワルシャワに生まれる。
- 1817年 (7歳)最初の作品『ポロネーズ短調』を作曲出版。
- 1818年 ワルシャワで初の公開演奏を行なう。
- 1830年 前年のウィーンでの演奏会成功を機にワルシャワを去りウィーンへ旅立つ。
- 1831年 ウィーンを去りパリへ向かう途中、祖国で起きた11月蜂起の失敗を知る。
- 1835年 両親と最後の再会。マリア・ヴオジンスカと再会。
- 1836年 マリアに求婚。ヨルジュ・サンドと出会う。
- 1837年 マリアとの婚約が破棄される。
- 1838年 サンドとマヨルカ島に滞在。夏はノアンのサンドの別荘、冬はパリで暮らす生活が始まる。
- 1839年 ジョルジュ・サンドとの別離が決定的となる。
- 1847年 イギリスへ演奏旅行。
- 1848年 最後のマズルカ作品68-4を作曲。
- 1849年 10月17日、永眠。39歳。



オーギュスト フランシヨーム



死の床にあるショパン

ある年、咳込みがちなショパンには、パリの冬は厳しすぎると、サンドはスペインのマヨルカへの旅を提案する。しかしこの旅は予期せぬ不運に見舞われた。滞在先が見つからないこと、温暖な気候を期待したものの悪天候に見舞われたこと、コレラなどの疫病を極端に怖がる土地柄、肺病を疑われたショパンへの村人の誹謗や差別が彼をひどく落ち込ませた。洗練と優雅さを愛するショパンには、修道院での質素な生活は苦しいものであったが、逆にサンドはそんな中でもたくましく日常生活を作り出す。滞在先の修道院に運ばれたブレイエル社のピアノで、ショパンは作曲に精を出した。『前奏曲作品28』の「雨だれの前奏曲」はここ、ヨルカのある嵐の夜に生まれた。昼過ぎから強くなった雨で帰宅の遅くなったサンドを喪ったと錯乱したショパンは朦朧とする意識の中でこの曲を弾いていたという。

1841年、ショパンはパリのサレ・ブレイエルでの大演奏会を成功させる。ピアノリストとして名を馳せている彼ではあったが、大ホールでの公演はあまりしていなかった。ショパン自身が、多くの聴衆を前にした演奏を嫌っていたというのもある。ショパンはその年の夏を、サンドの家のあるノアンで過ごした。この地でサンドと共に過ごすことで大演奏会の疲れとストレスを癒しながら『バラッド第3番作品47』など多くの曲を残している。

頼りがいのあるサンドと繊細なショパン。正反対なふたりの充実の時はそう、長くは続かなかった。過去の恋人でも平気で家に呼び寄せるサンドへ嫉妬することもあれば、前の夫の娘とサンドの静かにショパンが不用意に加勢してしまひ、サンドの怒りを買うこともあった。快速で貴族的な暮らしを求めるがあまり、繊細を通り越して神経質になっていくショパンに、サンドの苛立ちもヒークを迎える。互いの存在の大きさを感ぜつつも、このいわゆる「性格の不一致」は日増しに致命的となっていた。1846年に発表された、サンドの小説『ルクレティア・フロリアニ』の中には、あたかも神経質すぎるショパンに愛想をつかしたサンドの気持ちが書かれているかのようで、二人の間の溝はますます深まった。彼女はもともと自らの実体験を小説の中に書くタイプの小説家だった。

喪失感に駆られ、ショパンの創作活動がぐっと少なくなったこの時期に生み出されたのが『舟歌作品60』、そして『幻想ポロネーズ作品61』。作品61には過去の軍隊ポロネーズや英雄ポロネーズとは全く異なり、内面と向き合った切ない心の深淵や嘆息がポロネーズのリズムの上に表現されている。

パリに独り戻ったショパンは、再び優雅な貴族の弟子たちに囲まれ、作品64の『3つのワルツ』を長年の友人であるポトツカ伯爵夫人、ロスチャイルド男爵夫人、プアニツカ伯爵令嬢に献呈している。1846年には、これまた長年の友人であるチエロの名手のフランシヨームの助けを得て、『チエロ・ソナタ作品65』を完成させる。22歳の頃、リストの紹介で出会ったフランシヨームは、ピアノ一辺倒だったショパンに、室内楽に目を向けさせるきっかけを与えるなど大きな影響を与えた。フランシヨームとの友情は亡くなるまで続き、絶筆となったマズルカ作品68-4を筆写し、出版したのもこのフランシヨームだった。

サンドと別れた痛みはショパンを大きく蝕んだ。創作意欲は衰え、生活にも響くこととなる。ショパンを恋慕する弟子のスターリング姉妹は、ショパンのためにとロンドンへの演奏旅行を企画する。ショパンも生活を立て直すべくこの演奏旅行に臨むが、汽車、馬車を使つての大移動に未知の地での大演奏会、パリのサロン音楽会とは異なる興行的な雰囲気、ショパンはひどく疲れ切つてパリへ戻ることとなる。むしろこの旅で、サンドがしてくれていたことに否応なく向き合われ、その喪失感を、層深く刻み込んだ。

1849年の秋、パリのアルトマンで病と向き合うショパンのもとを訪れるのは、彼を愛する旧友たちだった。彼らはショパンを物心両面から支え、励ました。そのおかげで調子のよい時にはまた作曲をし、ショパンはその最期に、生涯にわたって書き続けたマズルカを書いた。20歳で抱いた不安の通り、一度も帰ることなかった故郷のポーランドをショパンは恋しがった。そして、故郷の姉との再会を望んだ。しかし、ポーランドを取り巻く情勢は未だ厳しく、自由な行き来が出来ない中で友人たちは姉の来訪を奔走する。姉とポーランド時代の旧友がようやく訪れたとき、ショパンの故郷への想いは張り裂けんばかりに募り、束の間の幸福の時間を過ごした。臨終の床の傍で、ショパンに乞われて、ポトツカ夫人がアリアを歌い、フランシヨームがチエロ・ソナタを弾いた。やがてショパンの命は消えるようになくなった葬儀はパリのマドレーヌ寺院が人であふれるほど盛大に行われた。ショパンの心臓は、壺に取められワルシャワへと向かった。それは実に19年ぶりに叶った故郷への帰還だった。

